

すれちがうずれから

大場さやか

繰り返し、繰り返し、繰り返し、繰り返し、繰り返し、曲が流れる度に同じ動きがとられる。しかし、動いては倒れを何度も行うダンサーの身体に、負担がかからないわけがない。繰り返し、同じ動きなのだが勢いが違ってくる。繰り返し、酷使された肉体が荒さを持つ。繰り返し、踊り終えたダンサー達は肩で息をしている。繰り返し、もう止めてあげると心苦しく思う。『オブ・ラ・ディ、オブ・ラ・ダ』がまた流れたら、彼らは踊らざるを、繰り返さざるを得ないのだ。何のために？

『RE/PLAY Dance Edit』は、執拗な繰り返しの中に、繰り返せないものの存在を認めていく。全体の中に埋没しない、他者と安易に一体化しない個を、際立たせていく。簡単につながらない私達の間、何をどうすれば伝達がなされるのか、挑戦していく。

ポーズを取り、止まる。ポーズを取り、倒れる。8人のダンサーが、それを繰り返していた、静かな空間に音楽が流れ出す。『We Are The World』だ。音楽にぴったり合うでもない動きは続く。やがて歌は終わるが、もう一度同じ曲が流れ出す。動きは続く。

その後が始まるのが、『オブ・ラ・ディ、オブ・ラ・ダ』の連続10回だ。最初の数回は、何度続くのかと不安になる。中盤、もう何度でも付き合おうという気分になる。ここまではまだ、ダンサー達は極力正確な繰り返しを行っていたように感じる。だからこの後にどんな変化が起こるのか知りたくなった。ダンサー達が変わったのは終盤の2、3回。動きに荒さが見えた。攻撃的になった。同じ動きではあるが、型があるとすればそこからのずれが大きい。どこまでのずれが同じ動きと認識されるのか、挑発しているようであった。

彼らはそれぞれ異なる背景を持ち、異なるスタイルのダンスを持っている。自身で行う自身の振り付けは、他者の存在を必要としない。他者との接触がない。所狭しと舞台を動き回る彼らは、巧妙に他者を避けている。ぶつかることは決してない。体を合わせたりすることはない。同じ舞台にいるのに、個のままである。それは観客が、同じ舞台を観ていても、個のままであるように。同じものを観ても感じるものや考えることは違うのが当然。人と人とは、簡単にはつながらない。

しかしそのつながらなさを、まるごと大きく包みこむ存在があった。歌である。驚くほどの大音量で鳴らされる音楽は、客席をも震わせる。力技で、会場全体をひとつのものにまとめあげてしまうのだ。

音楽が途切れる瞬間があった。しかしそのときにもダンサー達は踊っていた。切断というアクシデント、非日常の出来事にも、私達は慣性で対応してしまう。音が途切れたそのとき、ダンサー達の息遣いが聞こえる。それは、日常が切断された非日常になって、やっどこぼれ落ちることのできる独り言のようだった。

反復される動きは、変わり映えのしない日常のイメージか。望むと望まざると、似たような毎日はやってくる。私達はいつもと変わらないように、適切に動かなければならない。もう嫌だ、もう、飽きたと思っても、朝がくれば今日一日が始まってしまう。

だが、まったく同じ一日は存在しない。同じ時間に同じ行動をとっても、同じ動きにはならない。自分の動きを正確にコントロールすることはできないし、さらには外部からの様々な働きかけを避けることはできないのだ。他者の動きに影響されて、自分の動きも変わってしまう。直接ぶつかることはなくとも。すれちがうだけでも。

だから決して触れ合わないダンサー達も、それぞれが関与しあっている。接触はしなくとも、共に場の空気を動かしている。

怒濤の『オブ・ラ・ディ、オブ・ラ・ダ』を終え、ダンサー達の間では、打ち上げが始まる。体を動かしながら、他の誰かに何か尋ねたり、自分の近況を報告したりする。ここで、ダンサー達のバックグラウンドが垣間見える。自国ではどんな踊りを踊っているか。京都に来てどうか。

打ち上げが終わり、別々に帰っていく彼らを、再びダンスへと呼び戻すのは、女性ボーカルの『今夜はブギー・バック』。いくらかのだるさを抱えているであろう体は、それを手なずけるように踊る。続けて流れるのは、『ラスト・ダンスは私に』しっとりと終わるかと思いきやそうはいかない。

大音量で鳴り響きだすのは Perfume の『GLITTER』だ。否が応でも気持ちをあげるきらびやかな電子音。「ころぶのは 簡単で 減らないし カロリーは 立ち上がる のには いるの GLITTER」歌詞をなぞるように、ダンサー達は転んでは立ち上がる。「キラキラの夢の中で 僕たちは約束をしたね」そうこれは夢だ、夢なんだとばかりに、曲のラスト、ダンサー達は一斉に倒れる。このまま動きを止めて眠りに落ちたらどれだけ楽だろうとばかりに。ここだけは皆同じに。でも鳴るのだ、『GLITTER』が。あと2回、繰り返される。何のために？ 誰かと同じ夢を見るために。

誰かと同じ夢を見ようとするならば。特定の誰かを意識しなければいけない。その人はどう動き、どこへ向かっていこうとしているのか。誰かの行く先を見ながら、自分の行く先を決める。誰かと自分の向かう先が交わらなくとも、今、同じこの場にいさえすれば、共に何かを作ることはできる。それは空気という曖昧なものであるかもしれない。ただそこに熱が生まれたならば、それは皮膚感覚で伝わっていく。広く、その場を共にしたまた別の誰かに。

同じようできて、刻々と変わっていく自分。こうありたい自分からずれていく自分と、ずれを修正しようとする自分の間に、運動がある。そこから立ち上がり続けている熱を、表現として誰かに伝えることができる。動き続けてみればいい。それがダンスになるまで。それを何度でも繰り返せばいい。

---

大場さやか

石川県金沢市生まれ、在住。地元で開催された「かなざわりーショナルシアター劇評講座」への参加をきっかけに、劇評を書くようになる。